

旧曾木発電所

鹿児島県伊佐市
九州新幹線「出水駅」から車で1時間半

Sogi Hydroelectric Plant

資料提供: 1-5.熊本大学景観デザイン研究室 6,7.御書辰志 8-10.JNC株式会社

災害に消えた第一発電所、湖底に沈んだ第二発電所

鹿児島県伊佐市の鶴田ダム湖の底には、煉瓦造の優美な建物が沈んでいる。曾木第二発電所本館である。川内川上流域の曾木の滝周辺にはこの建物以外にも、川を眼下にのぞむヘッドタンクや、田畑の傍らを抜ける導水路など、一連の水力発電施設「旧曾木発電所遺構」が残る。

曾木発電所は大口・牛尾の両鉱山の動力源や、近郊町村の電灯供給を目的として建設された。曾木の滝の水力を利用する電気事業としてまず、明治40(1907)年、曾木第一発電所が落成した。第一発電所の余剰電力は熊本県水俣のカーバイド製造に供給されるとともに、この供給電力を増大させるため、4基の発電機からなる曾木第二発電所が建設され、明治42(1909)年には発電機1基が運転を開始する。残り3基の落成を目前に控えた明治42年、洪水の発生により、両発電所は停止した。泥水や土砂が押し寄せた第一発電所は復旧が試みられたものの同年、閉鎖された。第二発電所は導水路の一部が損壊したものの再開し、明治43(1910)年10月には4基の発電機により水俣へと送電を開始した。

第二発電所の周辺には社宅が設けられたほか、新たに集落が形成された。社宅に住んでいた職員の家族と集落の住民の間には交流もあったという。第二発電所は集落の電灯を灯し、集落には小さいながらも映画館が存在するなど、暮らしを彩った。両岸は吊り橋で渡され、子どもたちが吊り橋を揺らして、対岸から人が渡れないよう、いたづらをしていた、など当時のにぎやかな様子を伝える逸話が残る。しかし鶴田ダム建設に伴い第二発電所は廃止される。昭和40(1965)年ダムが完成すると、第二発電所本館は集落とともにダム湖の底に沈んだ。その後、川内川治水計画の見直しにより、鶴田ダムの水位を下げる夏場のみ、曾木第二発電所本館は、再びその姿を現すようになる。

数奇な運命をたどり、短命に終わった両発電所の遺構は現在、新たな役割を担っている。地元の強い要望により補強工事が行われた曾木第二発電所本館や、曾木の滝公園内の散策路として整備された第一発電所の導水路は、近代の面影に直に触れられる神秘的な空間として市民や観光客を魅了しながら、穏やかな時間を送っている。(永村 景子)



8.曾木発電所水路平面図 其の一・其の二



9.曾木発電所水路平面図 其の三・其の四



10.曾木発電所水路平面図 其の五・其の六・其の七

図面は、曾木発電所関連の史料として唯一確認されているものである。全7枚からなる曾木発電所水路平面図には、第二発電所の導水路約1.1kmの全形が描かれている。水路以外にも社宅や倉庫など、他の関連施設の配置が記されており、水路断面図なども併記されていることから、管理に用いられたものと思われる。曾木の滝と発電所本館をつないだ経路を示す当図面は、在りし日の発電所を伝える貴重な史料として、曾木の滝公園内にて紹介されている。



1.ダム湖からのぞく第二発電所本館跡



2.曾木の滝



3.第一発電所導水路跡



4.導水路跡を活用した散策路



5.第二発電所本館跡の公開の様子



6.稼動時の第二発電所



7.稼動時に撮影された記念写真
曾木発電所社宅に住む職員・家族と交流のあった周辺集落の住民が何らかの記念に撮ったとされる。

EYES

土木エンジニア ニューヴォー

未来を見通した土木のこれからを感じてもらえる

新しいコンセプトのプロジェクトを紹介します。

- EYES 001 モエレ沼公園
- EYES 002 岩見沢複合駅舎
- EYES 003 木野部(キノップ)海岸の磯場
- EYES 004 東京駅 丸の内駅舎保存・復原工事
- EYES 005 富山LRT
- EYES 006 穴太衆積みの石垣
- EYES 007 太田川護岸整備
- EYES 008 安田川 馬路村農協前水制
- EYES 009 道後温泉本館周辺広場
- EYES 010 嘉瀬川・石井樋地区歴史的水辺整備事業
- EYES 011 松浦川・アザメの瀬地区自然再生事業
- EYES 012 首里城城郭の復元